

沖縄における災害文化 —台風常襲地域の防災意識・防災行動に関する実証研究 Disaster Subculture in Okinawa: Empirical Research on Consciousness and Action of Disaster Prevention in Typhoon-Invasive Zone

○齋藤 さやか¹, 関谷 直也², 木村 匠³, 中村 真也³
Sayaka SAITO¹, Naoya SEKIYA², Sho KIMURA³ and Shinya NAKAMURA³

¹ 琉球大学 研究推進機構 戦略的研究プロジェクトセンター

Center for Strategic Research Project, Organization for Research Promotion, University of the Ryukyus

² 東京大学大学院 情報学環 総合防災情報研究センター

Center for Integrated Disaster Information Research, the Interfaculty Initiative in Information Studies, the University of Tokyo

³ 琉球大学 農学部 地域農業工学科

Department of Regional Agricultural Engineering, Faculty of Agriculture, University of the Ryukyus

Okinawa is a typhoon-invasive zone, and people seem to have their own typhoon subculture. The aim of this study is to confirm the typhoon subculture of Okinawa. In the questionnaire of 25 questions, people's anxiety to natural disasters, experiences, recognition and actions of a typhoon were investigated. As a result of the analysis, it was proved that people have their own typhoon culture on their foods, experiences and actions.

Keywords : Disaster Subculture, Okinawa, Typhoon

1. 問題意識

沖縄県は高温多湿、多雨の亜熱帯性気候に属し、台風の来襲が多い地域として知られている。沖縄県を通過する台風は、最盛期にあたり、最盛期の勢力を維持していたりすることが多く、猛烈な暴風雨や高波などにより大きな被害をもたらす¹⁾。また、年間の台風通過数は平均 7 個強に上り、沖縄県は特に強い勢力の台風の常襲地域であることが認識できる。

ある災害が多発する地域においては、発生の兆候や発災時の対処の仕方について、その土地ならではの知識や技術が発達することが示されている²⁾。そうした災害に関する知識と活用に関わる有形・無形の文化を「災害文化」と呼ぶ³⁾。

そこで沖縄に焦点をあてると、地域の人たちが経験をふまえて台風の対応策を考え、活用してきた“台風文化”が存在すると想定される。

例えば、長い間台風と闘ってきた経験から、家の周囲を石垣で囲み、フクギやガジュマルなどの木を植えて風対策を行い、寄棟造りで屋根瓦を漆喰で固め、台風に対峙してきた歴史があげられる⁴⁾。また、鉄筋コンクリート造りの建築物が多い要因も台風被害への対策にある⁵⁾。

さらに住居建築や植樹のみならず、台風来襲時に際して地域の人たちが持つ認識や行動の中にも、独自の知識や知恵、考え方、すなわち災害文化が存在するのではないかと考えられる。

本研究においては、沖縄における災害文化、台風常襲地域の防災意識と防災行動について実証するための調査研究を設計した。以下、調査概要及び結果について記述する。

2. 調査概要

本調査は、表 1 の調査概要に示す通り、沖縄県在住の 20代～60代の男女を対象に、2018年2月23日から3月6日にかけて実施した。有効回収数は、1180票である。回答者の属性は図1に示す通りである。

表 1 調査概要

1. 調査地域	… 沖縄県全域
2. 調査対象者	… 20代～60代の男女
3. 調査方法	… Webアンケート調査(楽天リサーチ)
4. 調査機関	… 2018年2月23日(金)～3月6日(火)
5. 有効回収数	… 1180票

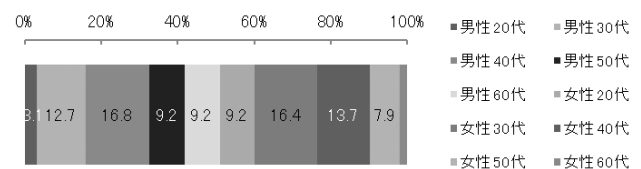


図 1 回答者の属性 (n=1180, 単位:%)

質問項目は全部で 25 問、主な質問項目としては自然災害への不安感、台風に関する知識、台風来襲前や来襲時における行動について質問している。また自由回答を設定し、台風来襲時に食する“台風食”、これまでの台風に関する印象強い記憶などについて質問している。

特に、本報告においては「(1) 居 (居住建物の造り)・(2) 食 (自宅退避中の食べ物)・(3) 行動 (台風時の行動に関わる経験談)」の 3 点に関する回答 (自由回答項目を含む) に焦点をあて、分析結果を提示する。

3. 結果と考察

(1) 居住建物と屋内退避行動

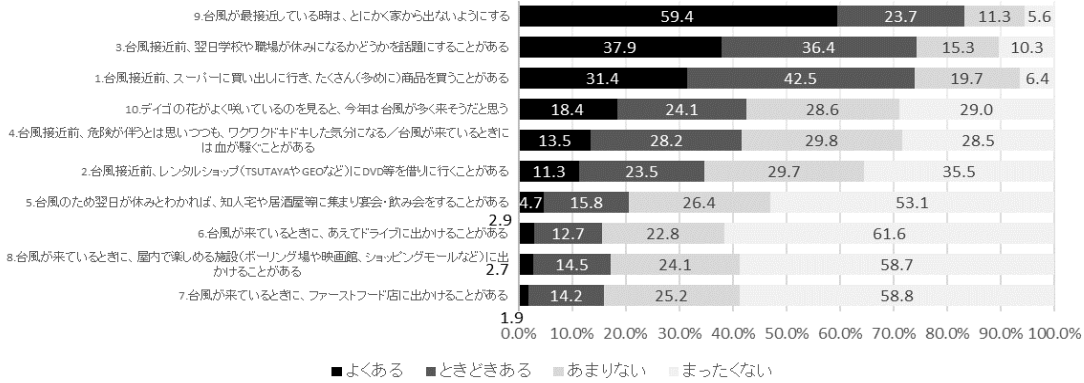


図2 台風に関する認識と行動 (Q17)

居住建物に関する質問 (Q25.あなたのお住まいの建物の造りは以下のうちどれですか. 1つ選択して下さい.) の結果, 6割以上 (61.0%) が「鉄筋コンクリート (RC) 構造」であり, 台風時における屋内退避に関する質問については (Q17.9) 図2の通り, 8割以上が「台風が最接近している時は, とにかく家から出ないようにする」と回答している (「よくある」59.4%+「ときどきある」23.7%の合計) .

(2) 食

次に, Q22.「あなたにとって, 台風のとくによく食べる食べ物 (“台風食”) はありますか. 思い当たるものをすべてご記入下さい.」についてはどうか. 最も多いのは, 保存でき調理が簡単なカップ麺等の「ラーメン」, 菓子パンなどの「パン」が多く, 3番目に「ヒラヤーチー (沖縄版お好み焼き) 」, 5番目には「ソーメ (ミ) ンチャンブルー (ツナやネギなどと炒めた素麺) 」が挙げられ, 常備している食材できる簡単な料理であることがわかる. 沖縄県では箱詰めになったツナ缶が, 台風に備えて購入される場面がよくある風景として描かれている⁹⁾.

(3) 行動—台風時の行動に関わる経験談

次に, 台風常襲地帯の沖縄県の人たちが, 台風とどのように付き合ってきたのか, 具体的な経験を分析し, 文化的な側面を探索した. 「あなたがこれまでに経験した台風エピソード (家族や近所の人・友達との思い出など), 印象に残っていることについて, どんなことでも結構ですのでお教えてください (Q23)」との設問に対し, 回答の文章型のデータを統計的に分析した⁷⁾. その結果は, 図3に示す通りである. 「台風」について, 最も多く用いられる語は, ①「停電」であり, そこに「家族」, 「ロウソク」, 「楽しい」が共起している. 具体的には, 「停電の中家族で一か所に集まりロウソクをつけて, 親の子供の頃の話を書いた」, 「トランプなどをしてとても楽しかった」との回答が見られ, 台風来襲時の工夫が見られる. 「家庭」の基盤となり, 家から出ないという対策の元, なるべく楽しく過ごす工夫, すなわちある種の“自助力”が機能し, 台風を乗り越えてきたととれる. 次に②「家」, 「飛ぶ」, 及び「風」の語が多く出現しており, 強い風による複数の影響があり, さまざまな記憶として残っていることが読み取れる.

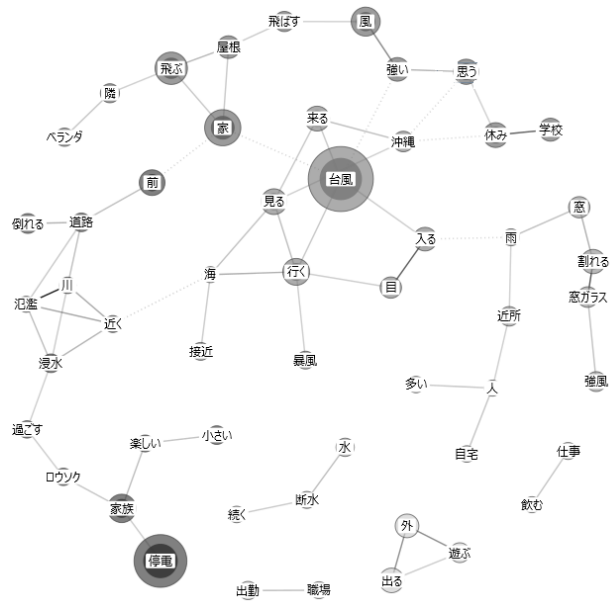


図3 共起ネットワーク分析結果「印象強い台風の経験」

以上の結果から, 台風常襲地域である沖縄県においては, 住宅の造りのみならず, 食文化・行動文化が存在し (家を出ない・自宅で楽しく過ごす工夫をすること), 台風と折り合う文化が形成されてきたことが認識できた. 今後, 量的な分析を加え, 考察を進めていく.

参考文献

- 1) 沖縄県防災会議 (2015) 『沖縄県地域防災計画』
- 2) 林勲男 (2016) 「災害文化」室崎 益輝, 岡田 憲夫, 中林 一樹, 野呂 雅之他『災害対応ハンドブック』法律文化社, pp.188-190.
- 3) 田中二郎 (1986) 「災害と人間」田中二郎他『災害と人間行動』東海大出版会, pp.2-23.
- 4) 佐藤照雄 (1992) 『沖縄の社会と文化』教育出版センター, p.20.
- 5) 渡久山盛清 (1999) 「台風と沖縄の戦後の住宅」『建築防災(1999.6)』, pp.36-40.
- 6) ウチナーあるある研究会 (2014) 『ウチナーあるある』, TO ブックス, p.11.
- 7) 樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析』, ナカニシヤ出版.